

呉趼人の『近十年之怪現状』と 『情変』について

麦 生 登美江

はじめに

周知のように呉趼人(1866—1910)は『二十年目睹之怪現状』(以下『二十年』と略記)を『新小説』に発表して以来、1907年までの五年有余、『九命奇冤』『恨海』など数多くの作品を世に問うて来た。だが、1907年『上海游驂録』執筆後、趼人の創作活動はやや鈍っているように思われる。その原因は、拙稿「呉趼人——憂愁から厭世へ——」(『野草』第12号)で指摘したように、清末の激動期にあって呉趼人の抱いた改革・救世の希望が次々と打ち砕かれ、厭世へと暗転していったためだと考えられるのだが、1908年以後もまったく執筆をやめてしまったわけではない。そこで本稿では最晩年における代表作とみなせる『近十年之怪現状』と、絶筆となった『情変』について検討してみたい。

(一)

『近十年之怪現状』(以下『十年』と略記)は、“社会小説”を標榜し、宣統元年(1909)の《中外日報》に連載されたようであるが、掲載の始めと終りの期日は現在の所まだ不明である。宣統2年(1910)9月、上海の広智書局から二冊の単行本として出版され二十回を収めるが未完で、一回ごとにさし絵があったという。¹⁾ これは従来、かの有名な『二十年』の続編とみなされて来たが、

1) 魏紹昌編『呉趼人研究資料』上海古籍出版社 1980年4月第1版 192頁。以下『資料』と略記。

ストレートにそうとも言えないフシがある。『近十年』は現在に至るまで、内容にまで立ち至って論じられることがきわめて少なかったもので、まず回を追って荒筋を紹介しておこう。

第一回 『二十年』では“九死一生”として登場していた人物が、実は姓は余、名は嗣儒、字は有声という人物であったことが冒頭でまず明らかにされる。余有声は商人で、蘇州、杭州および南北の各省に店を持っていたが、ある年たて続けに倒産したため、やむなく店を閉めて帰郷していた。数年後、有声は就職口を探しに上海に出て来て、旧知の伊紫旒から喬子遷らの金鉱局の事務の口を紹介される。

第二回 有声は一月、五十金で金鉱局に備われてそこに住み込むことになる。紫旒は一枚の官照を担保に妓女の月梅から二百元借りる。

第三回 魯薇園と李閑士が、金鉱の株を買いたいというフレコミで子遷らに接近する。有声の旧友の文述農から有声に至急面談したいという連絡が来る。

第四回 有声は述農から、子遷たちは金鉱詐欺であり、薇園らはその調査に来たことを教えられ慌てて逃亡する。一方、子遷も友人の田仰方から薇園の正体を知らされ、紫旒に後事を託して姿をくらませる。

第五回 紫旒は薇園、秦夢蓮らを花錦楼の所へ招待する。その酒席で秦佩金が秦夢蓮に嫉妬して醜態を呈す。

第六回 張梅卿の所で紫旒、陳雨堂らがマージャンをし、敬曾が勝った。紫旒は、梅卿に競馬を見に行く時につけるため髪飾りを都合してくれと頼まれ、牛性というブローカーから借りて貸してやる。

第七回 紫旒は梅卿に髪飾りの返却を迫るが梅卿がなかなか返さないで牛性がジリジリする。

第八回 薇園は紫旒が喬子遷らの一味であるかどうかを突き止めようとするが、尻尾をつかめない。牛性は自分で梅卿の所へ髪飾りを取り戻しに行くが返してもらえず、紫旒に斡旋を頼む。しかし紫旒が口実を設けて断ったので口論になる。

第九回 薇園は紫旒の尻尾をつかむために李閑士から二万五千両借りて、紫旒に金鉱局の株の代金を託そうとするが、薇園の意図を見抜いた紫旒はそれを

断る。さらに子遷の金銀詐欺を調査するため薇園が来滬していることが暴露されている新聞を見て、紫旒は茫然自失のフリをして自分に対する嫌疑を晴らす。しかしそれは紫旒自身がわざと新聞記者に書かせたものだった。

牛性はまたも髪飾りの返却を拒否されたのでやむを得ず警官に頼んで梅卿の所に取り戻しに行くが、梅卿の所ではみな口をそろえて牛性が梅卿に贈ったのだと主張したので、警官はそれを真に受けて帰ってしまい、結局、牛性は紫旒と梅卿の奸智にかかって髪飾りをだまし取られてしまう。

第十回 紫旒から子遷は広東にいると教えられた薇園は、高閑士に借りた二万五千両を着服し、広東へ行くフリをして秘かに船を乗り換えて天津へ行く。紫旒は許老十の書局を買わないかと勧められる。

第十一回 雨堂は秦夢蓮に17元騙り取られ、紫旒に借りに行くが断られたので、机上のさいふを持ち逃げする。五少大人が金月梅を娶って済南へ連れて行ったので、紫旒は月梅から官照を取り戻せなくなる。

第十二回 紫旒は老十から有利な条件で書局を買い取る。陳雨堂が帰宅してみると、家賃が払えないため妻がやむなく隣人に大切な書画を売っていたので大げんかになる。

第十三回 陳雨堂の世兄弟、陳蕙裳が山東撫台に升進したため、陳雨堂も紫旒に旅費を用立ててもらって山東に行く。

第十四回 妻の母が亡くなったのに、雨堂はかえって妻の訃帖を刻して人々から香典を巻き上げる。その後、蕙裳から官職をもらう。

第十五回 田仰方は陳撫院から資格をとび越えて籌防局総辦の役目をもらう。薇園は天津で張佐君という変名を使って洋行の軍服係の買弁になる。

第十六回 薇園（張佐君）は伍太守の口利きにより、孫少大人を通じて制軍に軍服を売込むことに成功するが、前金の十万両が支払われた所で洋行の孩尼低らは姿をくらます。

第十七回 ベテンにかけられて置き去りにされたことに気付いた張佐君は直ちに汽車に乗って北京へ行き、変装して本名の魯薇園に戻って同郷の世好の竜中丞から銅元局総辦を委ねられた。薇園は中丞が靈異な骨董を熱愛しているのを見て何か贈ろうとする。銅元局の司事、柏養芝は息子ににせの古鏡を作らせ、

それを薇園に三千両で売りつける。

第十八回 中丞はその古鏡を喜び、薇園に営務処総辦のポストを与えた。薇園は養芝を銅元局の会計係に任じて功に酬いた。中丞の娘の驪珠が役者の喜蛛児に片思いして寝込んだので、薇園が診察し、気晴しの物見遊山を勧める。

第十九回 大明湖に気晴した来た驪珠は趵突泉の品泉をする。数日後また悪くなったので、薇園は妻を驪珠の見舞いに行かせる。

第二十回 魯夫人は竜夫人に驪珠の婚約を勧める。驪珠は血痰を吐き、夢うつつの中で喜蛛児と結婚する夢を見るが、次の瞬間、それは青面獠牙の奇鬼に変わっていた。夢からさめた彼女はハラハラと涙を落とす。

ここで終わっているが、最後は「(驪珠の) 生命の有無については次回を待たれよ」という語句で結ばれている。とすると、研人自身、さらに続けて執筆する意図があったと考えられるのに何故か未完である。

上述のように、『十年』が清末における種々の“怪現状”を暴露しているという点では、文字通り『二十年』の続編であるとみなせる。しかし、物語の進行の仕方は異なっている。すなわち、二十年の方は“九死一生”と名乗る人物の見聞記という手法をとっており、“我”という第一人称で書き進められている。一見、長編小説風なのである。しかしその実、百以上の話柄を寄せ集め、それを“九死一生”を登場させることによって辛うじてつないでいるだけで、緻密な構成を有する近代的長編小説というわけではない。

それに対し、『十年』も“九死一生”即ち余有声が生活の道を求めて上海へ出て来る所から始まっている。この書き出しを読んだ限りでは、『十年』もまた『二十年』と同じく“九死一生”すなわち余有声の見聞記であることが予想される。しかし、実はさに非ず。間に挿入されたエピソードを無視して主要な登場人物のみを図示すると次のようになる。

主 役：余有声→喬子遷→魯薇園→伊紫旒→伊紫旒→陳雨堂→魯薇園→魯薇園→驪珠

ワキ役：伊紫旒→余有声→喬子遷→魯薇園→陳雨堂→張梅卿→陳夫人→俞梅史→竜中丞→喜蛛児

この図から、最初ワキ役で登場していた人物が次に主役の地位を与えられ、

またストーリーの変遷とともに消え去り、次のワキ役が主役が変わるという構成になっていることがわかる。

曾樸は“修改後要説的幾句話”の中で、胡適が『孽海花』を「多くの短編の物語を集め、それをつないで出来上った長編小説であり、儒林外史、官場現形記と同様の作法で予定したプロットはない」と批判したのに対し「胡適が、私のプロットが儒林外史などと同様だと言っているのは、私にはとても承認できない。確かに同じく多数の短編をつなぎ合わせて長編とした形式ではあるが、しかし組織法は儒林外史などと孽海花とでは截然と異なっている。儒林外史などは談話式であって、乙事を語れば甲事には関係なく、丙事に及べばまた乙事を捨て去り、気ままに進んだり退いたりできる。私のは波瀾起伏あり、前後照応し、緩急あり、順逆あり、すべてが不可分の組織ではないというだけであって、孽海花に複雑なプロットがないとは言えない」²⁾と反論している。

『孽海花』についてはひとまずおくとしても、この曾樸の反論は吳趸人の『二十年』と『十年』についてはあてはまるのではないだろうか。つまり『二十年』の方は、狂言回しの役を務める“九死一生”の動きにつれて物語は自在に生滅する。百以上もの話柄を寄せ集め、それを兎にも角にも長編小説らしいスタイルに整えるためには“九死一生”はどうしても必要欠くべからざる登場人物であった。

それに対し『十年』では上述したようにストーリーそのものが物語の進行を押し進めて行くため、『二十年』のような狂言回しの役は必要なかった。『十年』の冒頭で折角その正体を現した“九死一生”が第四回で早くも消え去った理由はここにある。

思うに、吳趸人が十年の執筆に取りかかった時にはおそらく“九死一生”を主人公にするつもりだったのだろう。しかし、書き進めて行くうちに筆の勢いで自然に“九死一生”すなわち余有聲は消えてしまった。『十年』はまた“九死一生”の筆記という形をとってもしない。それが『近十年目睹之怪現狀』(圈点、筆者)ではなくたんに『近十年之怪現狀』となっている所以である。

2) 曾樸撰『孽海花』 世界書局刊 中華民國56年12月再版“修改後要説的幾句話” 2～3頁。

しかもその『近十年之怪現状』という書名さえ、後に『最近社会齷齪史』と改めているのだ。“九死一生”を早々に退場させたことから生じた構成上の破綻を、吳趸人自身、自覚していたのかも知れない。

しかしまた、趸人は最初から“九死一生”を『二十年』におけるような狂言回しの形で使うつもりはなく、ただ物語の導入として登場させたにすぎないとも考えられよう。あるいは『二十年』の続編めいた『十年』を執筆するに当たって、“九死一生”という変名で押し通した人物の正体を読者の前に明らかにする責任を感じたのかも知れぬ。『十年』の前半第一編における主人公は伊紫旒であり、後半第二編の主人公は最初が陳雨堂、後は魯薇園であるとみなせよう。紫旒の奸智はそれなりにおもしろいし、薇園が悪事を糾弾すべく派遣された官吏でありながら「財を見て意を起こし、機械、心に生じ」³⁾ 李閑士の二万五千両を着服して姿をくらまし、陳中丞にも気に入られ、実入りのよい官職について出世していくというのも官吏に対する趸人の見方を象徴しているようである。確かに晩清の風俗絵巻としては『二十年』の方が精彩に富み、価値もあり、『十年』より『二十年』の方が高く評価されるのも故なしとしない。しかし、小説技巧という点では『十年』の方がやや進歩していると言えよう。

そしてまた、『十年』をストレートに『二十年』の続編として見るよりも、『二十年』とは異なった一つの独立した物語として位置づける方がより妥当のように思われる。

(二)

吳趸人の絶筆となった『情変』は、奇情小説を標榜し、宣統2年5月16日(1910)から《輿論時事報》に連載された。本来は楔子一回、本文十回の予定であったが、同年9月まで連載された所で趸人が物故したため中断してしまった。⁴⁾ 8回分だけ阿英編『晚清文学叢鈔』小説二卷下冊に収められている。『情変』も専論がほとんどないのでまず梗概を紹介しておこう。

3) 吳趸人著『近十年之怪現状』 阿英編『晚清文学叢鈔』小説二卷下冊 384頁。

4) 1) に同じ。196頁。

楔子に「たいてい情が極まればかえって不情となり、そこで変を生ず」⁵⁾とあり、情によって様々な事件が引き起こされることを暗示している。さらにこの書には白蓮教の子孫が登場するため白蓮教の幻術について記述する箇所があるので、「書中の事迹については中国の目で見、中国の耳でもって聞くようにし、外国の目で見、外国の耳でもって聞かないよう」⁶⁾要請し、その上で十回分の回目をまず紹介している。

第一回 冒頭で白蓮教の歴史を述べ、その後、登場人物の説明をしている。揚州・八里舖に寇四爺という白蓮教の末裔がいた。彼の岳父も少林寺派の達人だったので四爺の妻の四娘も武芸に長じていた。ある年、大雨による被害のため流民があふれたのを見て、寇夫妻は江湖に武を売ることを決意する。

近所の秦相公（亢之）と繩之の父は生前飢饉に備えて毎年たくさんのカボチャを保存しておいた。秦兄弟はそれを放出して村人を助けたので、村人はその恩を忘れず事ある毎に鶏や鴨などを贈ったので秦家はますます富んだ。亢之の息子、二官が八歳になった時、殷日校に家庭教師を頼んだ。日校は二官に白鳳という学名を与えた。

第二回 寇夫妻には武昌で女兒、阿男が生まれた。寇一家は万夫強宅に武芸師範として滞在していたが、夫強の上京を期に帰郷し、阿男も白鳳と一緒に勉強させることにした。だが、阿男が12歳になった時、四爺は彼女に勉強をやめさせて武芸を教えることにした。阿男が14歳になると四爺は彼女の結婚相手を探しに上京することにした。阿男は白鳳に自分の帰りを待つ約束をさせる。だが、白鳳にも、繩之の友人の娘、何彩鸞との縁談が持ち上がる。

第三回 秦亢之が死去したため、白鳳も家業を手伝うことになる。寇四爺は北京で万員外に再会し、近頃、北京で八卦教の取締りを強化することになったので、八卦教と間違われぬようにせよと忠告され帰郷する。阿男は白鳳の態度が冷淡に見えたので心変わりしたと思い込み床に就く。

第四回 白鳳の縁談を知った阿男は、深夜白鳳の部屋に忍び込み、自分と結婚したい旨を繩之に話すよう頼むが白鳳は逡巡する。四娘は相性が良ければ白

5) 阿英編『晚清文学叢鈔』小説二卷下冊 383頁。

6) 同前。

鳳との結婚を許すと約束する。喜んだ阿男はまた祝い酒を持参して白鳳を訪れる。この後、夜毎、阿男は白鳳の部屋に忍んで行くが、ついにバレてしまう。四爺の激怒を避けて、白鳳は直ちに鎮江の何仁舫のもとに身を寄せる。

第五回 四娘は四爺を説得して秦家に阿男との縁談を持ち込むが繩之に拒否される。阿男はまた床に就くが、四爺は村人の噂から逃れるため妻子を連れて再び旅に出る。

白鳳は仁舫の仁大布店に住み込み、仁舫に気に入られて娘の彩鸞と婚約するが、白鳳も阿男を思って病に伏す。

阿男は豊城から馬に乗って駆け戻り、白鳳を連れ出す。

第六回 二人は杭州で家を構え、阿男が法術を披露して生活費を稼ぐ。四爺は円光の法を用いて二人の居場所を突き止め、繩之とともに杭州へ向かう。四爺は阿男を連れ戻すが、白鳳は行方不明になってしまう。

第七回 寇一家は帰郷したが、阿男はまたも病に倒れ、軽快後は精神病に犯される。四娘は阿男を甥の余小棠と結婚させる。

白鳳は逃げる途中、ある廟で首を吊ろうとした所を和尚に救われ、写経をして日を過ごす。

第八回 繩之は懸命に白鳳を探すが消息がつかめず、何彩章とともに杭州へ向かう。途中、宿泊した廟で白鳳を見つけ、連れ帰って彩鸞と結婚させる。やがて彩鸞はみごもるが、予定日よりはるかに早く男児を出産したため潔白を疑われる。

ここで中断しているが、第九回の回目は、

感義俠交情訂昆弟 逞淫威变故起夫妻

第十回の回目は、

祭法場秦白鳳殉情 撫遺孤何彩鸞守節

となっている。この回目から察するに、あくまでも白鳳を慕う阿男が小棠の下をとび出して白鳳と結ばれるが、捕えられて阿男は死刑になり、白鳳も阿男の後を追ひ、残された彩鸞は子どもを養育しながら孤閨を守る、というストーリーが予定されていたと考えられなくもない。

趺人のもう一つの写情小説『恨海』には「幸いとするのはこの書は写情では

あるけれどもなお道德の範囲を脱せず、あるいは大君子の唾棄する所となるに至らざるのみ」⁷⁾と自註しているが、この『情変』もまた情に溺れて道德を踏み外すことを戒めようとする意図が濃厚である。

例えば第四回、阿男が初めて白鳳の部屋に忍んで来て明け方に帰った後、白鳳は「彼女のあの情緒纏綿たる様子ではひたすら私を思いつめているのだ。私とて木石ではない。どうしてその情に動かされないことがあろうか。私と彼女とは幼少より親しくして成長したのでお互いの気持は分り合っている。彼女と夫婦になるのは平素からの大願であるが、いかんせんこんなことは目上の人が主導すべきであって、私たち自身が各々たわいないことを考えていても夢想到終るだろう」⁸⁾と考える。それに対し呉趼人は「皆さん！これは秦白鳳が礼を以って自ら守る美点であります。他の人が写情小説に筆を染める場合は、色恋に浮身をやつす男女を描くのでありましょが、私はこの写情小説を語るのにまず一人の道学者を描きます。……これは正に私が世人を喚起する苦心なのであります。秦白鳳というきまりを遵守する若者は、深夜、恋人が来ても空しく彼女を帰らせた。しかし彼もやはり情に煩わされるのを免れなかった。この“情”というのは本当に人を誤ませるものであります」⁹⁾（大意）と述べている。

また、「阿男は心の欲する所に従ったが、もし彼女が心を落ち着けて静かに待っていたらよかったのに、彼女はあいにくそうしなかった」¹⁰⁾とも述べている。つまり趼人は、阿男らの不幸は阿男の不身持が招いた災いであるから、世の娘たちは身を慎しむようにと警告している訳である。

しかし、阿男と白鳳の不幸の原因は阿男の不行跡だけではない。阿男が母の四娘に白鳳への想いを告白した時、四娘は「都天廟へ行っておみくじを引いてみて、もし相性が良いようなら許してあげよう。でも占い師がお前は今年は何回も悪いので縁談は駄目だと言っていたから、これはどっちみち来年のこと

7) 呉趼人「雑説」『月月小説』第8号

8) 呉趼人著『情変』5)に同じ 427頁。

9) 同前。

10) 同前、429頁。

だね」¹¹⁾と答える。だが阿男は白鳳に縁談があることを知り、焦って翌年まで待ちきれず毎夜白鳳の部屋に忍び込んだことから白鳳と引き離される破目になったのだから、阿男と白鳳の不幸の遠因の一つはこの迷信にあると言えなくもない。

さらに阿男が白蓮教の幻術を修めていたことも不幸を増幅させることにつながった。というのは、黒装束に身を固めてこっそり白鳳の部屋に忍び込んだり、僅か一日で豊城から八里舗まで馬に乗って駆け戻ったり、仁大布店から秘かに白鳳を連れ出すなどの芸当は、並の娘には到底不可能なことだからである。

また幼少から毎日ともに学び、ともに遊んでいた二人が愛し合うようになったのはごく自然の成行であったと思われるが、秦家では寇家が江湖に芸を売る家柄であるのを嫌い、寇四爺もまた白鳳の文弱さが気に入らず、互いに別々の結婚相手を探そうとしたことも二人にとって不運であった。

とりわけ白鳳は儒教道徳に縛られて、阿男の再三の懇願にもかかわらず、繩之に打ち明けようとせず、叔父の言うままに何家の娘と婚約するに至る。さらに二人の仲がバレた後も彼らの結婚を許そうとしなかった繩之を趺人は「繩之は田舎の人間ではあるが少しは勉強もし、恥を知る心もあり、あれら自由結婚を尊重する人々が、先ず交際をし、その後で文明の礼とやらを行うことを不思議とも思わないのとは違うのだ」¹²⁾と賞讃している。旧道徳の回復を主張した呉趺人らしい注釈である。

このように様々の要因が重なり合って阿男と白鳳の悲劇が醸成されたのだが、『情変』における一番の問題点は、女性に対する呉趺人の先入観がまずあって、それをもとに阿男像が作り上げられていることにある。趺人は言う「皆さん！おおよそ世間の女というものは器量は浅く、猜疑心が強く、男に対しても信じている間はともかく、ひとたび疑いだすと他に愛人がいるのではないかとまで考え出すものであり、これが一定不変の理であります」¹³⁾と。こういう趺人の考える女の弱点を強く持った阿男が、ひたすら不幸のどん底へと落ちて行くのは

11) 同前。428頁。

12) 同前。437頁。

13) 同前。416頁。

無理からぬことであった。

ところが『恨海』の場合は義和団事変によって運命を狂わせられた二組の婚約者の悲歎離合を描いており、事変さえ起こらなければおそらくは幸せな結婚をしたであろう四人の男女への哀憫が全篇を貫いている。『恨海』についてはある程度まで義和団事変を反映した小説として、評価がほしい確定している所以である。

『情変』の方は、絶筆にもかかわらず、冨人の急逝によって未完に終わったせいもあってか『恨海』ほど注目されてこなかった。この作では白蓮教をストーリーの展開の重要な柱にしたことが新機軸とみなせよう。

おわりに

既述のように『上海游驂録』執筆後は、それまでのような旺盛な創作活動は見られず、主たるものとしては上述の二篇の他、『我仏山人札記小説』56則（1910年2月15日から5月14日まで《輿論時事報》に連載）、『滑稽談』154則（同じく《輿論時事報》）などがあるにすぎない。

冨人は『情変』第八回で、白鳳とやっとめぐり会うことの出来た繩之の有様を「中年の人は哀感を生じ易く、話しているうちにまた思わず涙を落とした」¹⁴⁾と述べているが、それは冨人自身のことでもあったろう。冨人はこの部分を書いて間もなく、数百万言をモノしながら志を果たすことなく、貧窮のうちに44歳で世を去ったのであった。私はとりわけ1908年12月『月月小説』停刊後の呉冨人の創作意欲の衰えが気になっているのだが、しかし彼が《輿論時事報》の編集に直接タッチしたかどうかは今ひとつはっきりしないものの、該報と深い結びつきを持っていたのは事実のようで、『情変』もまた該報に発表されている。最晩年の創作活動は《輿論時事報》に支えられていたと考えてよさそうである。生涯の最後に《輿論時事報》という執筆の場を与えられていたことに私は救いを見出している。

（むぎお とみえ）

14) 同前。478頁。